On the Distribution of Sentential Pro-forms it and so

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/992

節代用表現 it/so の分布について

岡　田　禎　之

0.導入

以前、岡田(1996)において、動詞句代用形の do it/do so の分布の違いや、その意味特徴を観察し、他動性(transitivity)の観点から両者を特徴づけることを試みた。本稿では、節代用表現としての it/so の分布に注目し、この両者の違いを前回と同様に他動性との関係においてどの様に特徴づけて行くことができるかを考察してみたい。ただし、動詞句代用形の場合と節代用形の場合では、異なる点も多々あるので、そのことについても考えていきたい。以下、1節において代表的な先行研究の概観とその問題点の指摘を行い、2節では他動性との関係を論じながら、it/so に先行する主動詞の意味タイプ別に分布のあり方を検討し、3節においてこれまで提出されてきた説に関する問題点について再考し、4節では動詞句代用形の場合との相違点について言及する。最後の5節はまとめである。

1.先行研究の概観

文に照応する代名詞についての言及は、Halliday & Hasan(1976),安井・中村(1984),Quirk et al.(1985),今西・浅野(1990),中右(1994)などにも見られるが、これらの研究では、it/so の対立の問題としてではなく、肯定形代用表現の so と否定形代用表現の not を対立させて考察が行われている。ここでは、名詞類代用表現の it と副詞類代用表現の so という対立で考察を進めたいので、これらの研究には（必要でない限り）基本的に言及しないこととする。it/so の対立において考察されている主要な研究は、筆者の知る限り以下に挙げる2つである。

1.1　Cushing(1972)

彼は、[±definite] という feature を設定して説明しようとした。これは、名詞句に対して与えられる definiteness の feature と並行的なものであり、文に対して与えられる場合は、以下のような特徴付けがなされている。[注1]

(1) a. An S is [+definite] if it carries within itself a specification of its truth-value. (Cushing 1972 p.198)

b. A [+definite] S corresponds to an asserted proposition. (ibid. p.199)

[−definite]S はもちろん、これと対立するものであり、truth-value に関する明確な規定を持たない、assert されていない命題ということである。誰が assert するかというと、話者ではなく、補文の意味上の主語であることは注意が必要である。

(2) a. Noam said that deep structure exists, and I believed it/＊so.

b. George asked me whether deep structure exists; I said that I believed so/＊it. (ibid. p.194)

(2a) の場合、意味上の主語である「私」'I'は、チョムスキーの主張に対して 'definite stance'を取っているが、これに対して (2b) の場合には、パラフレーズした文章に、更に文章を続けてみると違いが生じる。

(3) a. George asked me whether deep structure exists; I said that I believed it exists. But I wasn't sure.

b. George asked me whether deep structure exists; I said that I believed it exists. ＊And I would defend my belief against anyone who disagreed with me. (adapted from Cushing 1972 p.194)

it/so によって表されている補文の内容に対して、主語が積極的にそれが正しいことを主張する場合には it が、そうでない場合には so が選択されるということになっているのである。

この説明は意味的にはかなり納得できる部分の多いものであるが、しかし残念ながら言語活動を表す動詞（伝達動詞）に関する考察がなされていないことは問題である。この場合にも、it/so の交替関係が認められるので、このことも視野に入れた説明を目指すべきである。伝達動詞のことを考慮すると、"definite"の意味が問題になってくる。it が、主語が definite stance をとっている assertion に対応すると考えるなら、次のような問題が残ると思われる。

(4) a. John hasn't found a job yet. He told me so yesterday. (中右 1994 p.189)

b. ?John hasn't found a job yet. He told it to me yesterday.

ここでは (4a) の方が少し容認度が高くなっているのだが、この (4) に対して、間接話法的な発話内容を直接話法に変えると容認度のあり方が逆転する。

(5) a. ?John said, "I haven't found a job yet," and he told me so yesterday.

b. John said, "I haven't found a job yet," and he told it to me yesterday.

(4)でも(5)でも、Johnが言った内容は明確であり、しかもit/soの補文を取る意味上の主語もhe(= John)であるから、このように明確に主張されている命題内容に対してはitが選択されてしかるべきであるのに、実際にはsoでも良い。しかも、直接話法にするか、間接話法にするかで微妙に優先順位に差ができる。

次は、テキストからの例文であるが、原文ではsoを用いていて、itで置き換えることは不可能と判断されているものである。

(6) Before 1933, individuals who opposed trade unions and collective bargaining said so(* it) in plain English. (Brown Corpus A:3328)

ここでも、反対している人々自身が、反対している内容について言っているのであるから、"definite stance"を取っていることは明らかであり、itで代用することが自然なはずと思われるが、現実にはそうはなっていない。この様な例を説明するには、"definite"であるかどうか、という観点だけでは不十分であると思われる。

また、(4)や(5)からも分かるように、[+definite]と[−definite]という二分法で割り切ってしまうよりは、もっと段階性を認めた捉え方をした方がよいのではないかと考えられる。問題の捉え方がrigidにすぎるのではないかということも、問題であろう。

1.2 中右(1983)

この論では、[±anaphoric]という素性が想定されている。その定義は、以下のようなものである。

(7) ある事柄の知識(概念、命題)が、発話の時点に先立って、あらかじめ確定した話題として、話し手の意識の中にあるとき、その知識は既定的(anaphoric)である。

(中右 1983 p.549)

基本的には、itは既定的命題に対する代用形であり、soは非既定的命題に対する代用形であるが、しかし、前者の場合には曖昧であり、非既定的命題に対する代用形にもなるとされている。しかし、何故この様に代用形の守備範囲に不均衡が認められるのかは判然としない。この不均衡の証拠とされている例文は、非常にrigidな形でfeatureを固定するという想定から出てきているものである。

(8) a. John doubted that she was a spy, but Tom believed it/* so.
b. If you say so, I'll have to believe it.
c. Although Bob may not be a nut, many people have claimed it, and I think so too. (中右 1983 p.566)

(8a)において、doubt は既定動詞と考えられているので、that 節補文は既定的命題を含んでいるとされる。so はその既定的命題とは照応関係を結べない。つまり、so は非既定的命題とのみ照応しうるのである (it は既定命題と照応できる)。これに対して、(8b) では so によって代用されている命題内容は非既定的であるはずなので、これと同一命題を受けている it も非既定的命題を受けているはずであると考えられている。(8c)においても、it と so は同一命題に照応しているが、それは'Bob is a nut'という部分であり、この文脈では話し手の主張成分の一部をなすので、非既定的命題であると考えられている。it も so も両方とも非既定的命題とは照応できることから、it は既定・非既定の両方の命題と、so は非既定的命題とのみ照応すると考えられる。以上が中右氏の説明である。

しかし、(8b) を少し変えてみて、次のような文脈に置いてみてはどうだろうか。

(9) I've known of the idea that the U.S. economy is beyond repair, which has been supported by various kinds of data, but I didn't believe it. But if you, one of the most famous and intelligent scholars of economics in the world, say so, too, I'll have to believe it.

ここに出てくる so は、「アメリカ経済は破綻している」という命題を受けていると考えられるが、この意味内容は文脈にあるとおり、ずっと前から話者の意識には存在していたものであり、(その命題内容を真実として受けとめていなかったにしろ) 既定的な話題であると思われるのだが、so で代用することは十分可能なようである。

また、補文に対して一度既定性に関する feature を指定してしまうと、その値は変更されないといった rigid な捉え方では、以下の文に対してどの様な feature 指定をするべきか問題である

(10) A: Can you imagine that Bob bought a new car?
B: Yes, I can imagine it. I believe so. (so = Bob bought a new car)
B': No, I can't imagine it. I don't believe so. (so = Bob bought a new car)

このような文脈では、通常Aは「ボブが新しい車を買った」ことは知ってい

て、その事実に対して驚いているのであり、Bに対してもその事実を想像することができますか、と尋ねていると考えられる。つまり、that 節補文は既定的命題を表している典型的な場合と考えられるのである。これは、it が既定的な命題内容に対する代用形であることの例として提示されていたもの(cf. 中右 1983 P.561)であるが、この文章に'I (don't) believe so.'という文表現を繋げてみると、informal な形式ではあるが、談話としては可能な連鎖であるとの判断がある。もしそれが正しいのであれば、so は既定的命題を受けることができるということになるはずだが、これは(8a)の例文から導き出された予測と合致しないことになる。

2.他動性の観点からの分布状況の考察

do it や do so のような動詞句に対する代用表現の場合、Hopper & Thompson (1980)が提示した Transitivity に関するパラメーターのほとんど全てにおいて do it の方が他動性が高いという特徴が強く現れていた(詳しくは、岡田(1996)を参照のこと)。

(11)

PARAMETER	HIGH TRANSITIVITY	LOW TRANSITIVITY
A. Participants	2 or more participants, A(Agent) and O(Object)	1 participant
B. Kinesis	action	non-action
C. Aspect	telic	atelic
D. Punctuality	punctual	non-punctual
E. Volitionality	volitional	non-volitional
F. Affirmation	affirmative	negative
G. Mode	realis	irrealis
H. Agency	A high in potency	A low in potency
I. Affectedness of O	O totally affected	O not affected
J. Individuation of O	O highly individuated	O non-individuated

(Hopper & Thompson 1980 p.252)

これは動詞句全体が代用の対象となっている場合なので、Kinesis/Aspect/Volitionality/Affirmation/Agency などのパラメーターに関しても差異が明確になっているのだと考えられる(Punctuality と Mode のパラメーターに関しては、do it/do so の両者の間に何ら違いは認められなかったので、ここでは取り上げていない)。これらの意味的な様々なパラメーターを基本的に

決定しているのは動詞であり、その部分を含めて代用の対象としているからこそ、多くの違いが認められると考えられる。文代用形 it/so の場合には、このように多くのパラメーターに関して差異を認めることは期待できない。なぜならその直前にくる動詞（補文代用形をとる believe, imagine, tell, say などの動詞群）は代用形ではなく、本動詞であり、Aspect その他の意味特性については既に定まった値を持っていると考えられるからである。例えば、believe it/believe so の対において、違いがあるのは it/so という代用形の部分だけであり、動詞の部分は意味内容が明確に規定された本動詞 believe が共通して用いられている。一見、do it/do so の場合と類似しているようにも見えるが、ここで大切なことは、動詞句代用形の場合、it/so の部分だけではなく do の部分も代用形であり、先行詞となる動詞の意味特質によって、全く性格の違った意味を持ちうるということである。

(12) a.The child stepped into every mud puddle, and he did so on purpose.
b.?They think he is mad, and we do so, too.

(13) a.He just made a chair by himself, and he did so by using only the basic tools.
b.John sang at the Karaoke bar, and Bill did so, too.

(14) a.John hit a third base in the third inning, and he did so, again, in the seventh inning.
b.John hit Bill by mistake, and Mary did so, as well.

(15) a.He evaded a clear answer, and she did so, as well.
b.The politician eluded the law, and the judge did so, as well.

(16) a.Owing to the earth's rotation, the sun rises every morning, and will continue to do so for an infinite time in the future.
b.The event took place, and it did so by chance, without design.

以上の例文を一瞥しただけでも、同じ do so という代用表現であっても、その意味内容は実に様々であるということがわかる。(12)のように action/non-action の両方の意味と do so は対応しうるし、(13)にあるように telic/atelic のどちらにも対応する。また、(14)では、volitional/non-volitional のどちらにも対応し、(15)では negative verbs と照応している。最後の(16)では、agency の低い動作主との結びつきが示されている。

この点、本稿で扱おうとしている believe it/believe so のような対立関係においては、同じ「信じる」という意味の動詞が用いられており、これは non-action, atelic, volitional, affirmative, Agent high in potency という意味特

徴を既に持っていると考えられる。この部分に関しては、どちらの代用表現を用いても基本的に変化はなく、両者の意味側面はかなり類似していると考えられる。そうすると、補部にある it (代名詞) /so (副詞) の部分にこそ差異を求めるべきであると思われる。動詞句代用形の場合と同様に仮定するならば、S believe it/S believe so においては、前者が複数の参与者をもち、後者が主語位置にしか参与者をもたないことを考慮すれば、前者を後者よりも他動性の高い表現として位置づけることができそうである。すると、Hypothesis of Transitivity (Hopper & Thopmson 1980 p.255) に従えば、特に Object に関する意味特性について (Affectedness of Object/Individuation of Object) も同様に、前者の方が後者よりも他動性が高いという予測が得られる。以下、この予測が正しいものであるかどうかを、動詞を便宜上3つのグループに分類しながら考察していくこととする。[注2]

2.1 心的態度・思考内容を表す動詞グループ

believe/guess/imagine などの思考動詞群は、it/so の代用表現との関わりにおいてもっとも注目されてきた動詞群である。まず、Affectedness との関係から考察を始めてみる。

2.1.1 Affectedness of Object

目的語位置にある命題内容に対する affectedness が強いということは、その命題に対して主語要素が関与しようとする度合いが強いということだと考えられる。これは、Cushing が動詞に対して与えようとした [±stance] という素性に相当するものである。[注3]

(17) a. Noam said that deep structure exists, and I believed it/* so.
b. George asked me whether deep structure exists; I said that I believed so/* it.(=(2))

(17a) の場合には、文主語の「私」が'a definite stance with respect to Noam's assertion'を取っているのに対して、(17b) の場合には、これをパラフレーズした文章に更に文章を続けてみると違いが生じると Cushing は言う。

(18) a. George asked me whether deep structure exists; I said that I believed it exists. But I wasn't sure.
b. Georege asked me whether deep structure exists; I said that I believed it exists. * And I would defend my belief against anyone who disagreed with me. (=(3))

その他の Cushing の挙げている例をみても、間接疑問である if (whether) 節補文が先行詞表現となっている場合に、後続文の主語が補文内容に対して強い確信を持っていないように見受けられる。以下の例は全て it による代用は不可能と判断されている。

(19) a. I don't know if pronominalization is interpretive, but I (would) suppose so.

b. I don't know if rules have to be extrinsically ordered, but I (would) guess so.

c. I don't know if the U.S. economy is beyond repair, but I believe so.

(Cushing 1972 p.189)

しかし、このような判断に対して対立する判断もある。

(20) A: Is neg-raising cyclic?

B: I don't believe so.

B':?* I don't believe it. (except as rebuttal to claim presupposed behind the question) (Lindholm 1969 p.151)

(21) a. John wondered whether Bill is a spy, but I don't believe so.

b. John wondered whether Bill is a spy, but I don't believe it!

ここでも、通常は so という代用形が選択されているが、しかし、it も不可能ではない。それは、Lindholm も示しているとおり、特殊な場合なのである。(20B') のように先行詞となる疑問文が修辞的な疑問であり、意味的には肯定主張文に相当するような状況でそれを否定する文脈や、(21b) のように、強く疑問の内容を否定して、明確な態度表明をしようとする場合には it も許されるというのである。つまり、先行詞表現が疑問文であって、その真偽内容が明確になっていないようなものであっても、その真偽判断に対して主語要素が強く関与したい場合には、it は可能なのである。

(17) に再び話を戻すと、(17a) においては、他者 (Noam) が正しいと主張した命題内容に対して主語 (I) も賛同しているのであるから、同じように命題内容が正しいことを積極的に示せる形式 (it) を用いるのがふさわしいと考えられる。これに対して (17b) の様に、真偽内容が判然としないものとして疑問形で導入された先行文に対しては、明確な真偽判断の根拠がないのであれば、その真偽判断に対してあまり強く主張せず、中立的な態度で意見表明をする (believe, guess などの動詞を用いて) 方が、誠実な態度であると考えられる (そしてこの時に選択される代用形は so である。同じことは (20B) や (21a) にも当てはまる)。Cushing が提示した (18a,b) は、この様な主語の中立的な態

度表明をパラフレーズさせることによって、その違いを際立たせる形になっているものと考えることができる。しかし、話はそこで終わってしまうわけではなく、個人的に強く判断内容に対して明確な態度を表明したい場合には、そのことを表明しても何ら問題はないのである（この場合には(20B')や(21b)に示されているように、it が選択される)。注意が必要なことは、(19)において Cushing が提示している例文は、全て先行文の主語も、後続文の主語も同じ「私」だということである。「私」が疑問として提示している内容に対して、同じ「私」が強く真偽判断に立ち入った形で主張するのは不自然であるので、この場合には it による代用は不可能と判断されるのである。

Cushing の提示している例で、もう一つ affectedness という意味要因と関連があると思われるものは、以下の例である。

(22) a. I don't know if rules have to be extrinsically ordered, but I (would) guess so.

b. He thought that I didn't know that it was Lakoff who invented generative semantics, but when he asked me I guessed it.

(Cushing 1972 p.189, p.202)

so が用いられるのは guess が'suppose'の意味のときで、it が用いられるのは 'make a guess'（または'correctly make the guess'）の意味のときである、と Cushing(1972 p.202)は説明しているが、殊更に guess の意味を 2 つに分けてしまう必要はないのではないかと思われる。so が用いられる場合には、代用形に対応する補文命題に対する affectedness の度合いが低く、it が用いられる場合にはその度合いが高くなっているのであり、guess するという動作自体は同じであると考えても差し支えないように思われる。その guessing の内容に対する主語要素の確信の度合いにこそ違いが求められるべきであろう。

更に付け加えるなら、ここでも so が用いられている(22a)においては、先行文も後続文も主語は「私」が用いられており、so の先行詞は間接疑問文になっている。(19)と同様の典型的な so が出現する環境なのである。これに対して、(22b)では、先行詞節を含んだ主文の主語は第三者であり、その第三者の間違った想定に対して、「私」が強く反発している状況であり、「私」のもつ真偽判断の正しさを主張するためにも it を用いるべき文脈であると思われる。[注4]

2．1．2　Individuation of Object

代用の対象となる命題が、個別化の進んだものである場合にはitが、そうでなければsoが好んで用いられるはずだというのがここでの予測になる。まず、Cushingの挙げている例からみてみる。

(23) Paul thinks that complementation is partly semantic and Carol believes it/so, too. (Cushing 1972 p.195)

ここでitが用いられた場合には、Carolは「Paulの意見に対して同調している」という意味になり、soが用いられると「ある意見を持っているが、それがPaulの持っている意見と同一であるかどうかは不明」というニュアンスがあると指摘されている。つまり、itの場合には特定の個人と結びついた特定命題を指すのに対して、soの場合には特定の個人とは結びつかないある一つの命題を指しているのであり、前者の方がより個別化の進んだ命題であると考えられるであろう。

(24) a. A: She didn't look like a sane person at the party.
B: Yes, I observed so/* it, as well.
b. A: She didn't look like a sane person at the party. She even plunged into the swimming pool in the courtyard half-naked.
B: Yes, I observed it/* so, as well.

(24a)の場合には、彼女に対する全般的な判断が対象になっており、それだけ対象がぼやけているが、(24b)の場合には、全体的な判断だけではなく、それを裏付けるような具体的な動作がある（半裸でプールに飛び込むこと）ので、非常に具体化した個別的な動作を指示対象として想定できる。この場合にはitの方がよいという判断になる。(24b)では、soという選択肢は不適切であると判断されているが、これは直前の「飛び込む」という動作の部分を指示するには不適切であり（itの方が適格である）、更にこの文の前にある全般的な印象判断の部分を指示するには、間に介入する文章が長くまた非常に具体的であるために、指示対象となる印象判断の部分を強く想起することが難しくなるという理由から、指示対象を確定することができず、その結果容認不可能という判断になるようである。

次の例は、意味解釈の可能性が全く変わってしまう珍しい例である。

(25) Max believes Dirksen has a frog in his throat, but I don't believe it/so. (Lindholm 1969 p.150)

Lindholmは、この場合にはit/soの両方が容認できるとし、前者の場合believeという動詞はaccept the claim that Sという意味になり、後者の場合にはhave the opinion that Sという意味になると報告している。前者は

より客観性の高い命題内容、他者が事実として提示した個別化の進んだ命題内容を指し、後者は話者自身の主観判断に基づく、客観性の低い命題内容を指している、と考えられる。しかしそれだけではなく、筆者が得た判断では、この2文に対してもっと明確な解釈の違いを認める話者がいる。それは、a frog in his throat という表現の意味解釈についての違いである。この表現には、字句通りの意味（蛙が喉にいる）と比喩的な意味（喉が痛くて、しわがれ声である）の2つがあるが、it が用いられた場合には、前者の意味が優先され、字句通りの解釈を否定するという意味が強いというのである。so が用いられると解釈の可能性は逆になり（というより、より曖昧になり、どちらの解釈をも射程に入れることが可能になり）、自然な解釈であるところの比喩的な解釈が否定されるという意味に取られるようである。この判断が正しいとするならば、解釈の射程がより狭い it の方が、より個別化の進んだ命題を指すという予測と合致するのではないだろうか。so の場合には解釈の射程が絞り込まれていないのであり、a frog in his throat の持つ意味の個別化が進んでいないと考えられるのである。

同様の例は、Hankamer & Sag(1976)にも挙げられている。

(26) John believes that the earth is larger than it is, but Joan doesn't believe it. (Hankamer & Sag 1976 p.419)

ここで、it が対応する命題内容には、矛盾する解釈とそうでない解釈の2通りが考えられるが、it によって代用できるのは、文字通り“the earth is larger than it is”という命題であり、矛盾する解釈しか得られないというのである。

以上のような観察結果が正しいものであるなら、心的態度や思考内容を表す動詞の場合、it が用いられた場合の方が so という選択肢の場合に比べて、affectedness/individuation の度合いは高くなると思われる。

2.2　言語行為を表す動詞のグループ

この動詞グループについては、これまであまり注目されてきていないように思われるが、ここでも2つの意味側面に着目して検証してみたい。この動詞群はコーパスにも多く出現しているので、ここでは実際のテキストからの例文も交えて話を進めていく。

2.2.1　Affectedness of Object

この側面に関しては、残念ながらあまり明確な形での反応の違いは認められなかった。非常に微妙な違いでしかないようである。

(27) a. For in almost less time than it takes to tell it(** so), Henri's body -weight was increasing rapidly. (Brown Corpus E:18)

b. "The hero of his next poem is Napoleon Bonaparte," said Claire, with slightly overdone carelessness. "How do you know that?" demanded Mary. "I was told it(* so) on good authority," Claire answered darkly. (Brown Corpus k:2863)

a, b 両方の場合において、it が指示している内容はかなり具体的である（このことについては、後述の２．２．２を参照）。so による代用はどちらも不可能であると判断されるが、しかし、その置換可能性には若干の違いがあるようである。a に比べて b の場合の方が so と置換できる可能性は高いという判断がある。a の場合、動作主体は一般人称的なもので明示されてはいないが、能動態による積極的な主体の関与が示されている。これに対して b の場合は、主語は動作の受け手であり、it によって指示された内容を自らの意志を持って伝達する動作主ではなく、伝達される側である。それだけ、代用表現によって表される命題内容に対する関わり方は積極性に欠けるものであり、意味上の主語が関与する度合いは低いと考えられる。このような状況では、so による代用の可能性が若干ではあるが高くなるようである。

(28) Japan, she said, smelled <pugh> because people let dead fish lie on the beaches till the fish got hard as rocks; then they scraped off the mold and made fish soup. Camels in Tripoli had harelips. Near Galway the tinkers drove their caravans down to the beach and sang and drank and fought all night. As for dancing—holy mackerel, he ought to see the gypsies in Jerez; they danced on the sand till your blood got hot and danced with them. "Really." Quint smothered a yawn. She made better pictures than any book he'd read, but he didn't say so (it). (Brown Corpus P:2183)

原文では so が用いられている。が、it の使用も可能であるという判断を得た。この場合両者にはニュアンスの違いがある。即ち、it の場合には先行文の内容を口に出して言おうとする意志が感じとられ、その意志を自ら押さえ込もうとしている、というニュアンスがあるのに対して、so が用いられると、そもそもその様な意志が存在するかどうかも不明である、というのである。それだけ、前者の表現形式の方が代用表現に対応している命題内容に積極的な関与をしようとしている主語の態度を反映している、と考えられる。つまり、it の選択が affectedness の高さと結びついていると考えられるのである。

2．2．2　Individuation of Object

この側面に関しては、前節の Affectedness の場合に比べて差異は明確である。まず、1節において提示した直接話法と間接話法の間での容認性の違いの問題から考えてみる。

(29) a. John hasn't found a job yet. He told me so yesterday.
　　b. ?John hasn't found a job yet. He told it to me yesterday.(=(4))

(30) a. ?John said, "I haven't found a job yet," and he told me so yesterday.
　　b. John said, "I haven't found a job yet," and he told it to me yesterday.(=(5))

このような違いは、[±definite], [±anaphoric] といった feature 設定では扱えないものであるが、individuation（個別化）という概念を導入すれば、扱えるのではないかと思われる。直接話法は、ある話者が言った言葉をそのまま原型通りに復元するものであるのに対して、間接話法は報告者が時制、人称、ダイクシスなどに変更を加えて、報告者の発話文の一部として取り込んでいく表現形式である。前者では、発話内容は報告者の地の文からは独立した個別の意味単位を形成しているが、後者では、報告者の地の文の一部として取り込まれてしまっているのである。発話内容自体の自立性、個別性という観点から考えれば、前者の方がその度合いが高いと考えて差し支えないと思われるが、その時 it という代用形が好まれ、間接的な話法になって報告者の観点が強くなってくると、発話内容自体の個別性の度合いは下がって so が適切という判断になってくるように思われる。

次は、コーパステキストからの例文（原文では so を用いていたもの）を考えてみる。

(31) a. Before 1933, individuals who opposed trade unions and collective bargaining said so(＊ it) in plain English.(=(6))
　　(Brown Corpus A:3328)
　　b. Most of them sincerely believe that the Anglo-Saxon is the best race in the world and that it should remain pure. Many Northerners believe this, too, but few of them will say so (it) publicly.
　　(Brown Corpus G:84)

(31a)においては、人々が言ったであろうセリフそのものが提示されていない（その内容が主旨だけをまとめた形になって、(they) opposed trade unions and collective bargaining という表現になって提示されている）。しかもこの場合、人々の言ったことの内容は間接話法よりも更に手を加えられて、伝達

動詞の部分と被伝達命題部の境界が無くなってしまっている。人々の言った言葉の内容は著しく個別化度の低い形で示されているのであり、soによる代用が適切と判断されている。これに対して(31b)の場合には、人々が口にしたであろう表現がかなり具体的な形で提示されていると解釈することは可能であるので、まずitによる代用が可能と判断されている（つまり、この場合は文字通り「アングロサクソンは優秀な種族であり、純血を保つべきである」とはっきり口にしている人がごく少数存在しているという状況を描いている)。と同時に、soの先行詞ともなりえるのは、(31a)の場合と同様に、人々が実際に口にした言葉は様々な形を取っていて、それをまとめれば主旨としては「アングロサクソンは優秀であり、純血を守るべきだ」という意味になる場合も想定できるからだと考えられる。(29),(30)におけるコントラストよりも(31a)におけるコントラストの方が明確であるのは、それだけ直接的な表現を加工して間接的な表現に作り変えている度合いが高いと考えられるからだと思われる。

今度は、逆に原文ではitが用いられていたコーパステキストからの例文を検証してみる。(32)においては、soによる代用は不可とされ、(33)では可能という判断を得た。

(32) a. I reached my hand toward him to put it inside his shirt to feel for a heartbeat, but Charlie said "Wait!"—and said it(* so) sharply, not as in the Patchen bit, but as an order—so I stopped my hand and looked at him. (Brown Corpus L:3622)

b. "Arlene's a good girl," my uncle remarked to us; but he said it(* so) too soon, for it came out just before the tap to which the door responded. (Brown Corpus R:758)

c. "I realize that this is hardly the time to say it(* so), Penny," said Keith. "But knowing you, I know that you're glad to be alive, and grateful—and sorry because I killed the snake, even though I had to. (Brown Corpus N:3466)

(33) Something had to be done; it was the theme song of millions of American people, their personal problems no less urgent than those of the government. Something had to be done. The Abernathys said it(so) to each other a dozen times a day. (Brown Corpus P:195)

(32a)の場合、itが受けている内容は直接話法で語られた命令文"Wait."という個別化の進んだ対象物であり、しかもsharplyという副詞表現も、この対象

物を地の文から際立たせるのに役立つ意味内容を持っていると考えられる。[注5] (32b) (32c) の場合にも、指示対象は特定の個人が発した具体的なせりふであり、非常に特定的な、個別性の高い指示内容になっている。従っていずれの場合にも、so による代用は不可能と判断されている。これに対して、(33) の場合は、先述の (31b) に類似しており、it/so の選択によってニュアンスの違いが生じている。it が用いられれば、もちろん"Something has(had) to be done."というフレーズそのものがいわばスローガンとなって人々の口にのぼっているという状況を描いていることになる。so が選択されれば、指示対象の内容はぼやけていき、どのような手段を講じればよいのかといった問題など様々なことを人々が語り合ったという状況を表すことになる（この場合"Something has(had) to be done."という主旨の様々な発言があったということをニュアンスとして伝えることになる)。ちなみに筆者のインフォーマントの判断では、(33) の場合、原文で用いられている it よりも so の方がふさわしいのではないかという判断があった。この文脈においては、作者が描出話法的に登場人物の内面に入り込んでいるが、時制は過去であり、登場人物の視点からではなく作者の視点からの選択であるので、ある程度間接話法的な側面も混在している。このことが so の選択を容易にしている一つの原因ではないかと思われる。

以上のような例は全て同一の方向性を持っており、it による代用形式が個別化の度合いの高い指示対象と照応していることを示していると考えられる。

2.3　代用形に it しかとらないグループ

これまでのところ、思考動詞、伝達動詞の例を考えてきたが、これらの動詞群では it/so の両方を代用形として従えることが可能であった。(もちろん意味に違いが反映されているのであるが。) ところが、動詞によっては最初から it しか取らないというものも存在する。それが、以下に挙げる factive/strong assertive/negative の 3 つのグループの動詞である。(中右 1983 pp. 552-553) これらの動詞に共通することは、まず主語要素の命題内容に対する関与の度合いが高いことである。対象となっている命題は既に事実として明確に認定されているもの (factive)、正しいと強く想定されているもの (strong assertive)、または逆に否定されているもの (negative) でなければならないのであり、命題内容に対する主語の態度表明は相対的に強いものと考

えられる。また二つ目には、これらの場合にはかなり個別化の進んだ命題内容が対象になっていることも共通していると考えられる。命題内容が、具体的で明確なものでなければ、それを事実として認定したり、強く主張したり、否定したりするということは、そもそも成立しにくいからである。つまり、これらの動詞グループは、本来的にObjectに相当する命題に対するaffectednessの度合いも高く、またその命題内容のindividuationの度合いも高いものでなければならないという意味指定を持っていると考えられるのである。もしこのような考えが正しいものであるならば、この動詞群がitを代用形として選択することは不思議なことではないであろう。

ところが、同じitを代用形として取る3つのグループの中でも、factiveとそれ以外の2つの間には若干の差異が認められる。ここではその点に着目して話を進めていきたい。

2.3.1 Factiveのグループ

ここでは、(34)にはthat節補文を先行詞とする例、(35)にはif節を先行詞とする例を挙げておく。soによる代用は全て不可能であるが、itによる代用に関してはthat節補文の場合にだけ可能と判断されている。

(34) a. Although we pointed out to Janet that her boat could inevitably be torpedoed by the Chinese, she persistently ignored it/* so.
(Anderson 1976 p.172, p.174)

b. John regretted that Bill had done it, and Mary regretted it/ * so, too. (Kiparsky & Kiparsky 1970 p.166)

c. John knew that the election was on Monday, but I forgot it/* so.

d. John found out that the rate of consumption tax would be raised, and I resented it/* so.

e. John found out that he failed in the exam, and I regretted it/* so.

(35) a. * John didn't know if the election was on Monday, but I ignored it/so.

b. * John didn't know if the rate of consumption tax would be raised, and I resented it/so.

c. * John didn't know if he failed in the exam, and I regretted it/so.

Kiparsky & Kiparsky (1970)以来、factive verbsは前提(presupposition)とされていることを補文内容に取ると考えられてきた。補文内容は、客観的事実として真偽が確定した内容であることが求められるのである。このこと

は、(35)のようなif節を先行詞とする場合（つまり、真偽の確定していない疑問文の内容を先行詞として取る場合）に、たとえitで代用しようとしてもできないということからも支持できる。ここでは、John didn't knowで始まる先行文全体が先行詞であるならば、itで指示することが可能になる。この場合、先行詞の文全体は既に事実として確定したものであるから、factive verbsの補文に対応することが可能になると考えられる。

2．3．2　Strong assertive (non-factive)のグループ

(36) a. John found out that I committed the crime, and I admitted it/＊so.
b. John heard that Bill was back in town, and I confirmed it/＊so.
c. John didn't know that the money should be paid at once, but I insisted on it/＊so.

(37) a. John wondered if I committed the crime, and I admitted it/＊so.
b. John wondered if Bill was back in town, and I confirmed it/＊so.
c. John wondered if the money should be paid at once, but I insisted on it/＊so.

相変わらず、soによる代用は不可能であるが、しかしこのグループが先ほどのfactive verbsのグループと違っているのは、(37)にあるようにif節補文が先行詞になっていてもitで受けることは可能だということである。このグループは先述のように補文内容の妥当性を強く主張するグループなので、基本的にitを従えるけれども、その補文内容は客観的な事実として確立したものでなくても良い(non-factive)のである。真偽が決定していないものに対して、自己の判断を強く主張していくということは十分可能な動作だからである。

2．3．3　否定的な意味を持つ動詞のグループ(non-factive)

この動詞群が、補文内容に対する主語の積極的な（否定的な）判断を表しうることは、まず以下のパラフレーズを見れば明らかである。

(38) Vennemann doubts/disbelieves that rules have to be extrinsically ordered.
＝Vennemann believes that rules do not have to be extrinsically ordered.
≠it is not the case that Vennemann believes that rules have to be extrinsically ordered. (Cushing 1972 p.188)

さて、このグループも non-factive であるので、factive verbs とは異なり、必ずしも真偽が客観的に事実として確定していない命題内容であっても補部に従えることは可能であると考えられるが、実際(40)にあるようにこの予測は正しいものである。

(39) a. Edwin was convicted of having exhibited himself in a public place, although he vehemently denied it/＊ so.

(Anderson 1976 p.172, p.174)

b. John was certain that Bill was a spy, but I doubted it/＊ so.

c. John was certain that she committed the crime, but I disbelieved it/＊ so.

d. John was certain that the theory was on the right track, but I disconfirmed it/＊ so.

(40) a. John wondered if Bill was a spy, but I doubted it/＊ so.

b. John wondered if she committed the crime, but I disbelieved it/＊ so.

c. John wondered if the theory was on the right track, but I disconfirmed it/＊ so.

以上、ここでは代用形 it しか取らない動詞群を見てきたが、中でも factive/non-factive の 2 つのグループの間に若干の違いがあることを指摘した。non-factive のグループは文字通り、事実として確定していない内容を先行詞として取りうるのであり、factive verbs よりも照応形 it が呼応しうる範囲が広いことが示されたことになる。

3 .先行研究にあった問題点について

ここまで Affectedness/Individuation という 2 つの側面を中心として、it/so の分布の違いを考えてきたが、1 節で述べた問題点に対しどのような解答を与えることができるのかを考えてみたい。Cushing の考察に関して提示した問題点は、2 節で説明しながら話を進めてきたのでここでは省略するとして、(8)～(10)について考えてみたい。

(41) a. John doubted that she was a spy, but Tom believed it/＊ so.

b. If you say so, I'll have to believe it.

c. Although Bob may not be a nut, many people have claimed it, and I think so too. (=(8))

(41a)は(38)のパラフレーズに従えば、John believed that she was not a spy,

but Tom believed that she was a spy.ということになるであろう。つまり2人の意見が対立しているわけであり、対立の元になっている命題内容も明確であるし、Johnの持っている信念に対して、Tomは違う信念を抱いているのであるから、その信念の度合いが高い方が逆接的な接続表現のbutとも整合しやすいし、自然な文章のつながりを形成すると考えられる。インフォーマントの判断では、この文脈ではsoは確かに用いられないが、文として不自然になるということが要因のようであった。itが選択されるのは、she was a spyという命題内容のaffectedness/individuationの度合いが高い方が自然な文のつながりになると判断されるからだ、と説明することは可能であろう。

(41b)については、次の(42)との比較において問題となっていたのであるが、ここでの考え方を踏襲すれば、不思議な現象と考えなくても良い。

(42) I've known of the idea that the U.S. economy is beyond repair, which has been supported by various kinds of data, but I didn't believe it. But if you, one of the most famous and intelligent scholars of economics in the world, say so, too, I'll have to believe it. (=(9))

'say'という動詞の後にsoという代用形がきていることは、既定性と関係しているのではなく、この代用形によって表されている意味内容が、具体的で個別化の進んだ内容として想定されているか否かにかかっていると思われる。ここでsay itという形が用いられれば、「アメリカ経済は修正は不可能である」という具体的な発話内容を指すことになるが、say soであれば、アメリカ経済の破綻にまつわる様々な状況説明も含めて、経済学者である'you'の意見全体を指しているというだけである。また、(42)においては、最初のbelieveも2度目に登場するbelieveもsoではなくitを従えているが、ここでのニュアンスとして、まず前者の場合は、「どうしても信じることができない」という非常に強い積極的な否定判断を表しているため、affectednessの度合いが高いことが関係していると考えられる。また後者の場合にも「アメリカ経済破綻」という事態を強く信じなければならない、という態度表明を表しているのであり、これは経済学者に対する敬意を払う意味でも語用論的に適切な表現形式であると考えられる。

(41c)では「ボブが馬鹿かどうか」という問題が取り上げられていて、多くの人々はこの問題に肯定的に反応しているのであり、しかもそれを強く主張している(claimという動詞が文字通り人々の命題内容に対する確信の強さを表している。これはstrong assertiveのグループに属する動詞であり、基本的にitしか取らないけれども)。これに対する話者自身の反応はそれほど

確信の度合いが高くもないため、so が選択されている。しかし、話者自身も強く確信しているのであれば、(43)のように it を用いることは自然な選択である。

(43) Although Bob may not be a nut, many people have claimed it, and I believe it, too.

また、逆に人々が口にしている内容をさほど強く主張しなくても良いと考えるならば、この部分に so という代用形を用いることも可能である。

(44) Although Bob may not be a nut, many people have said so, and I believe it, too.

最後にもう一つ残されていた問題である、典型的な既定的命題を表している例について見直してみる。

(45) A: Can you imagine that Bob bought a new car? (=(10))
B: Yes, I can imagine it. I believe so. (so = Bob bought a new car)
B': No, I can't imagine it. I don't believe so. (so = Bob bought a new car)

これは、話者Aが「ボブが新しい車を買ったこと」を想像できるかどうか尋ねているが、通常の文脈ではこのような質問をする場合、括弧付きの部分は既に事実として認定している部分であると考えられる。Bはまず A の立場を尊重して、「ボブが車を買ったこと」を事実として受け止め、it で代用しているが、しかし、この事実想定は A によってなされているだけで、B 自身が事実として認定しているものではないため、B はこの命題内容に対して100%の信用をもてず、若干の疑念を提示することは可能である。このような気持ちの揺れが、it から so という代用表現への変化として表されていると考えられる。[注6]

4. do it/do so との分布の違いについて

節代用表現 it/so について、他動性との関わりで考察してみたわけであるが、しかしここには動詞句代用の do it/do so の場合とは大きく異なる点もある。それは、後者の場合には、基本的に do so という形式が do it という他動性の高い形式が対応しうる全ての場合に対して基本的に照応関係を結べたということである。節代用の場合には、これまで見たように it/so の両者の棲み分けはかなり強くあり、it で代用できる場合の全ての場合において so による代用が可能とは言えないのである。

ただし、何故 do so が do it の照応しうる領域をカバーできるかという問題

を考えたときには、節代用表現の it/so との間に共通性が認められることも事実である。do it が他動性の高いパラメーター指定を多く受けているために、その意味制限に合致するような先行詞以外は取れないのに対して、do so はほとんど意味的なパラメーターの指定を受けておらず中立的であり、それ故 do it が照応する先行詞も含めて、どのような先行詞表現にでも柔軟に対応していける、ということがあった(詳しくは岡田(1996)を参照のこと)。同様の現象は、(25), (31), (32), (33)などの例にも認められる。Individuation of Object の観点からすると、it はかなり特定的な指示物を必要としているのに対して、so の場合には it によって指しうる事態も含めたより広範な範囲を指示対象とすることができるということがあった。ここでは、so は it の内容を包括しているように思われる。また Affectedness of Object に関しても(28)の様な例では、it が積極的な話者の態度を示唆するのに対して、so にはそのような示唆は含まれない中立的な解釈が与えられている。代用形 so の場合には、満たしていなければならない意味的特徴の指定が it に比べて少ないということが、この事実からも推測できる。この点は do it/do so と類似していると考えて良いのではないだろうか。

ところが、問題なのは、このような類似性もありながら、一方では、it/so の選択が、意味の違いに直結しているということである。これは、(25), (31), (32), (33)や(28)の場合でも同じことであった。筆者は、この問題は、2 節の冒頭部で述べた動詞句代用表現と節代用表現の違いと関連していると考えたい。問題は、文の意味を決定づける中心的な役割を担っている動詞の部分が代用表現の一部に含まれているか、そうではなく本動詞であるかということに関係していると思われる。例えば、believe という動詞の場合、(代動詞の do とは違って) 意味内容は明確であるので、この動詞が it と組み合わせられた場合には、具体的な意味解釈が与えられる。それは、「ある特定の命題内容を信じていて、かつその命題内容に対する確信の度合いは強いものである」といったものになるであろう。do it の場合には、この表現単独でこのような具体的な意味は取り出すことができない。先行詞となる動詞句が意味内容を指定する働きを持っているからである。これに対して、believe so の場合は「ある命題内容を信じている」という中立的な意味を持ち、命題に対する確信の度合いが高いか低いか、命題内容の個別化の度合いが高いか低いかという指定は受けておらず (少なくとも(25)の例から個別化の度合いについての指定は受けていない可能性が示唆される)、潜在的には広範な命題内容を先行詞としうるものであるという可能性がある。しかし、believe it の持つ非常に具体

性の強い意味解釈の存在のために、「ある命題内容を信じていて、かつその命題内容に対する確信の度合いはさほど高くもなく、個別化の度合いも低い」という意味領域を受け持つように解釈されるのではないだろうか。いわば意味解釈上の division of labor が行われているのであり、それを発動している要因を考えた場合には、(動詞句代用形の場合とは異なり)文の意味内容を決定する中心的な働きを持つ本動詞 believe が存在しているということがそこに大きく関わっているものと考えられる。

極端な場合を考えれば、2.3節にあった一連の動詞群では、動詞の本来的に持っている意味指定のために it という代用形としか結びつかないということもあり、「本動詞と代用形」という組み合わせが「代動詞と代用形」という組み合わせの場合と事情が違うということがあっても不思議ではないと考えられる。

最後に、動詞句代用形と節代用形の考察を通じて共通して言えることとしては、次のようなことが挙げられる。筆者は、以前の論文から一貫して Hopper & Thompson(1980)の考え方を利用してきたが、この考え方では participant が一つしかない場合(つまり目的語が表現されていない場合)、affectedness of Object/individuation of Object の度合いが低いというのは当該の目的語がそもそも存在しないのであるから当然であると考えられ、何ら事実関係を予測することに寄与しないとも考えられる。しかし、代用形の場合の他動性の問題を考えてみると(つまり、名詞ではなく副詞的な要素が通常目的語が占めるべき位置に置かれ(do so/believe so など)、しかもその構造が、名詞句目的語を取る構造(do it/believe it など)と対応しているという特殊な状況を考えてみると)、彼らの予測していた他動性の違いが正しく当てはまるということが示せたのではないか、と思うのである。

5. まとめ

本稿では、節代用表現の it/so に着目し、動詞句代用表現の do it/do so との類似点や相違点を指摘してきた。従来2つの代用形がそれぞれ違う意味特性を持ち、その意味特性に合致する先行詞を選択すると考えられてきたが、考察の結果、考慮すべき意味特性は1つではなく、少なくとも2つあると考えられる。他動性の観点から考察し、複数のパラメーターが融合して、ある文章の適合性が判断されると考えてみれば、このような結論は当然得られるべきものであろう。it/so という最小対立においても、意味機能の区別が存在することは明白であり、表現形式とその意味機能の間にある対応関係はここ

にもはっきりと見て取れるのである。

注1.ちなみに今西・浅野(1990 p.251)でも definite という特性を it/so の分布の特徴付けの基本として取り上げている。「文照応形 it は、定(definite)な内容を表す補文の意味内容を指し、文照応形 so は、不定の内容を表す補文の意味内容を指すと言える。」

注2.so が前置されて文頭にくる場合があるが、これは so が補文の位置に生起した場合とは異なる談話上の機能を果たすことが指摘されており（中右1983 p.568)、振る舞い方にも違いが認められる（例えば、この用法は hope, suppose, think などの動詞には適さない）ので、この問題はここでは扱わないことにする。

注3.結局、Cushing はこの［stance］という素性は普遍的に重要なものではないと考え、［definite］という素性に一本化しようとしている。

注4.if so (* if it)や even so (* even it)のような、仮定世界の状況を描く場合にも so が選択されていることは、確信度が決して高くないことを示すために so を用いるという観察結果と共通している部分があると思われる。

注5.命令文を先行詞とした文代用形 so は、基本的に認められないことは山梨(1986 p.128)にも指摘されている。

(i) * Shut up then, as your Dad told you so.

(ii) * Let him go, since the boss said so.

注6.更に、［±definite］,［±anaphoric］の様な素性指定を採る方法にとっては、以下のような it/so の両方が対応可能と判断される例文は問題となるであろう。

Your wife was under the impression that you would be away tonight, and as you can see, I imagined so/it, too. (Anderson 1976 pp.172-173)

この例文の判断にも微妙なところがあるが、まず、インフォーマントの判断では、so は問題なく照応でき、it の場合に若干不自然さが感じられるということがあった。しかし、いずれにせよ、前者が用いられた場合には、imagine という動詞は think にほぼ相当するような弱い思考動詞としての解釈がなされるのに対して、後者の場合には、より強く特定の状況を想像した（聴者が今夜外出しているという特定の状況がどんなものであるか、より具体的な想像をした）というニュアンスが加わるようである。ここでも、後者の場合の方がより個別性の高い事象と照応していると考えて差し支えはないのではないかと思われる。

参考文献

Anderson, S. (1976) "Pro-sentential Forms and Their Implications for English Sentence Structure." In *Syntax and Semantics 7: Notes from the Linguistic Underground:* 165-200.

荒木一雄（編）(1986)『英語正誤辞典』東京：研究社

Bolinger, D. (1972) *Degree Words.* The Hague/Paris: Mouton.

Cushing, S. (1972) "The Semantics of Sentence Pronominalization." In *Foundations of Language 9:* 186-208.

Davidson, A. (1975) "Indirect Speech Acts and What to Do with Them." In Cole, P.& J. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics 3:* 143-185.

Goossens, L. (1994) "Transitivity and the Treatment of (Non) prototypicality in Functional Grammar." in Engberg-Pedersen, E., L. Jakobsen & L. Rasmussen (eds.) *Function and Expression in Functional Grammar.* Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Halliday, M.A.K. & R. Hasan (1976) *Cohesion in English.* London: Longman.

Hankamer, J. & I. Sag (1976) "Deep and Surface Anaphora." In *Linguistic Inquiry* 7: 391-426.

Hooper, J. (1975) "On Assertive Predicates." In Kimball, J. (ed.) *Syntax and Semantics 4:* 91-124.

Hopper, P. & S. Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse." *Language* 56: 251-299.

------(eds.) (1982) *Syntax and Semantics 15: Studies in Transitivity.* New York: Academic Press.

Horn, L. (1989) *A Natural History of Negation.* Chicago: The University of Chicago Press.

今西典子・浅野一郎(1990)『照応と削除』(新英文法選書１１) 東京：大修館書店

Kiparsky, P. & C. Kiparsky (1970) "Fact." In Bierwisch, M. & K. Heidolph (eds.) *Progress in Linguistics: A Collection of Papers.* The Hague/Paris: Mouton.

Lindholm, J. (1969) "Negative-raising and Sentence Pronominalization." In *Chicago Linguistic Society 5:* 148-158.

中右実(1983)「文の構造と機能」in 安井稔・中右実・西山祐司・中村捷・山梨正明『意味論』(英語学大系５) 東京：大修館書店

------(1994)『認知意味論の原理』東京：大修館書店

岡田禎之(1996)「代用表現における他動性について」『岡山大学文学部紀要25号』121-141. 岡山大学文学部

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech & J. Svartvik (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

安井稔・中村順良(1984)『代用表現』(現代の英文法１０) 東京：研究社

山梨正明(1986)『発話行為』(新英文法選書１２) 東京：大修館書店